新たな動きを止めない農業経営

農事組合法人三重伊賀里山整備活用組合

井手の里山風景

企業概要

代表理事	更井 順哉 氏
所在地	名張市青蓮寺2771番地2 TEL:0595-63-1667　FAX:0595-48-5665
設立	2010年（平成22年）10月
資本金	1,000万円
従業員数	13人（パート含む、2022年10月現在）
事業内容	米（食用・飼料用・酒造用等）の生産・販売、果樹（イチジク・ブラックベリー・ラズベリー等）の生産・加工・販売、観光農園「ideca（イデカ）」の運営

様々な農業事業への取り組みで地域や人を元気にしていく

異分野事業へ挑戦するも壁…

名張市井手の里山風景が広がる一帯に、果樹園・カフェ・農産物加工販売の機能を有した複合型観光農園「ｉｄｅｃａ（イデカ）」が２０２２年夏にオープンした。同施設を運営するのは、農事組合法人三重伊賀里山整備活用組合で、名張地域を中心に農地所有者から土地を託され、米や果物などの生産・販売を行なっている。

同法人を設立したのは、代表理事の更井順哉氏だ。更井氏は建設会社の経営者であるが、08年9月に起きたリーマンショックの煽りを受け、受注が激減し、新事業の検討を強いられた。そんな中、三重県は急激な雇用情勢悪化の対策として、「バンブーバスターズ事業」を実施していた。同事業は、スギやヒノキ林に侵入し森林破壊をする竹を伐採することで、森林破壊を防止するとともに、失業者の就業機会創出を図るための事業だ。「事業を通じて大量に伐採される竹がタダ同然で入手できる」。更井氏は「竹」を活用したビジネスにチャンスを見出した。そこで、建設業とは全く畑違いの、竹材を利活用したキノコの栽培とバイオマス燃料の生産・販売という事業への挑戦を決め、10年10月、名張市内に同法人を設立した。

試行錯誤の連続であったが、キノコもバイオマス燃料も商品として販売できるまでになった。しかし、竹材を活用したキノコやバイオマス燃料の生産には想定外の手間や費用がかかった。さらに世間的には認知度が低い上に、販売単価が安く収益確保が難しいという大きな壁にぶつかり、撤退を決断。しかし、更井氏は立ち止まることなく、新たなチャレンジに向けて動き出した。

再チャレンジ！米の生産・販売へ

新たなチャレンジは米の生産・販売。農地の大半は、高齢化や

担い手不足などで稲作を止めざるを得なくなった地元農家や住民から預かったものだ。農家とのコミュニケーションを大切にし、着実に信用を積み重ねることで、農地の管理依頼は年々増加し、2022年度は44万㎡まで拡大している。

同法人の生産・販売方法は、一般的な米農家と異なる。一般農家では「コシヒカリ」や「ひとめぼれ」などの主食用米を生産し販売する事業者が多い。しかし、同法人では酒米、飼料米、輸出用米などの米に当初から取り組んでいる。その理由は米の需給状況により、国の助成・補助の対象となる米の種類が変化するため、様々な米の生産に柔軟に対応した生産・販売体制を整備しなければ、継続的な経営は困難と考えたからだ。また、販売についても、生産した米の一部または全部をJAグループに卸す米農家が多い中、同法人では商社や畜産事業者などの取引先へ生産した米の全てを販売している。取引先とは、更井氏が電話による飛び込み営業を行い、繋がりを作ったという。

銘柄別に米を販売

取引先のニーズを反映した生産であるため、米の種類や量は毎年異なり、一般農家では対応が難しい。しかし、同法人はこれまでのノウハウを活かし、独自の生産・販売スタイルを確立した。また、田植え時期（3～4月）には販売先が確定し、さらに取引先のニーズに対応した商品であるため平均単価以上での契約が可能となることで、経営の安定・収益性の確保に繋がっているという。「農地の管理依頼は今後も増加が予想される。地元農家とより密接なコミュニケーションを図り、農地集約化や農業者間の協力体制を構築していけるようにしたい」と更井氏は語る。

井手地区との出会い、果樹栽培へ

名張市に「井手」という地区がある。同地区より農地の管理依頼を受けたが、用水路の問題で米生産は難しいとわかった。しかし、当地の山林斜面に田畑と住宅が広がる美しい里山風景に一目惚れした更井氏は、この地区の風景を残したいと思い、管理依頼を請け負った。

当地の活用法を検討する中、大阪の漢方薬総合卸メーカーが国内産の漢方用薬草の栽培事業者を募集する事業があることを知り、応募。全国数十社から3社が選ばれ、同法人は見事に採択を勝ち取った。約2万㎡の農地で薬草を栽培し、販売先も決まり幸先の良いスタートが切れたかに見えたが、採算面でやむなく撤退を決断することになった。

しかし、地元住民から「当地から出ていかないでほしい。引き続き管理をお願いしたい」との要望を受け、再び活用を検討し始めたところ、従業員から「ここで果物を作ってみたい」との声があり、果樹栽培を始める。従業員の強い思いと近隣に競合が少ないという理由から、栽培のメインをイチジクに決めた。現在では20種類を超える品種を生産する。また、ブラックベリーやラズベリー、ラ・フランスなど少し珍しい果物も生産している。

農園のイチジク栽培

そして、従業員の提案もあり、当地を観光農園に転換することに決め、16年頃に六次産業化に向けた取り組みを進めることとなった。

複合型観光農園「ideca（イデカ）」の開業

どのような観光農園を運営したいかや、どんな施設であれば当地の活性化に繋がるかなどを従業員らと何度も話し合い、生産から加工・販売まで行う複合型の観光農園を構想し、事業計画を策定した。策定した事業計画は、地域を守り活性化を目指す事業計画であることなどが評価され、21年2月「六次産業化・地産地消法」に基づく総合化事業計画として、名張市内で2件目となる農林水産省の認定を取得した。

併設のカフェと商品

農林水産省より各種支援を受けながら、22年7月1日に複合型観光農園「ideca（イデカ）」をオープン。施設では、新鮮な果物や野菜、ジャム・ドライフルーツといった加工品や地域の雑貨などが購入できるほか、併設されたカフェで旬の採れたてフルーツをふんだんに使用したスイーツを井手の美しい里山を眺めながら食べることができる。カフェメニューは、奈良市の人気カフェ・雑貨店「くるみの木」と菓子研究家の福田里香氏の監修を受け、考案している。また、施設裏側に広がる果樹園では様々な果物の収穫体験ができる。

同農園は、地域住民の働く場所として雇用創出の場になっているほか、施設で販売する果樹や米などの生産にかかる作業の一部を、市内の「名張市手をつなぐ育成会もみじの家（就労継続支援B型事業所）」に依頼することで、農福連携にも取り組んでいる。「今後は、より多くの人に井手を訪れてもらい、地域を活性化するために、ホームページ開設や物産展への出品など、県内外へのPR活動を本格化していきたい。」と更井氏は話す。また、施設サービスの充実のために、ワークショップ・イベントの開催や冬に収穫できる果物が少ないことから「いちご」を筆頭に新たな品目の栽培を検討している。

自分たちが納得できるように動く重要性

事業撤退を2度経験しても、新事業へのチャレンジを止めなかったことについて、「動かないと何も生まれないし、どんな事業や取り組みもやってみなければ正解かどうかはわからない。自分たちが納得できるよう行動を起こすことが重要」と更井氏は語る。

いくつもの事業に挑戦し続け、地域から必要とされる事業を作り上げた更井氏。今後も新たな事業にチャレンジし、農業で地域を盛り上げる同法人に注目していきたい。

文＝コンサルティング事業部　服部 諒

支店より一言

リーマンショックの苦境から新事業に乗り出すと同時に地域の活性化も担う同法人。オープンしたideca（イデカ）は更井代表の「納得できる行動」という想いが詰まった複合型観光農園です。井手の里山風景を眺めながら新鮮な果物をふんだんに使ったスイーツタイムは至福のひととき。観光業に力を入れている名張市に新たな名所が誕生しました。地域の期待を背負いながら今日も更井代表はチャレンジし続けています。

百五銀行 名張支店長
林 延尚